

日本語能力試験聴解「即時応答」における 解答プロセス

板橋貴子

[キーワード] 日本語能力試験、聴解、即時応答、解答プロセス、テ形従属節

[要 旨]

本調査では、日本語能力試験（以下、JLPTと略す）の聴解問題「即時応答」で、従属節の聞き取りを問う2題を日本語中上級以上の非日本語母語話者45名に解答してもらい、解答プロセスについて回想法でプロトコルを採取した。即時応答に解答する際、どのように正答を選んでいるか、どうして誤答を選んでしまったかをプロトコルを通して概観していく。その中で、中上級以上であっても、テ形従属節の聞き取りにおいて、語義の推測を誤ったり、格助詞に注意が向かず、動作主を誤ったりして、正答を選べないことが分かった。また、スクリプトの意味が理解できない場合には、機能の推測やムードを頼りに選択肢を選ぶというストラテジーも観察された。本研究はJLPT聴解試験の妥当性検証を質的に行うという役割を担っている。

1. JLPT「即時応答」とは

JLPTは、非日本語母語話者（以下、NNSと略す）の日本語能力を測定し、認定する試験として、1984年に開始され、2010年に課題遂行のための言語コミュニケーション能力を測定するよう改定された。N1を最上位とし、N1からN5まで5段階のレベル別で年に2回実施されている。

改定後の聴解試験では、「言語知識を利用しながら、音声テキストを理解して、課題を遂行する能力」を測っており、即時応答は、改定時に新設された問題で、「相手の発話にどのように応答するのがふさわしいかを即時に判断できるかを問う」3肢選択式問題である（国際交流基金・日本国際教育支援協会 2010）。スクリプトも選択肢も音声で提示される。

即時応答N1問題例⁽¹⁾（国際交流基金・日本国際教育支援協会 2010）

[スクリプト] 男性： あーあ、今日は、お客さんからの苦情が多くて、仕事にならなかったよ。

[選択肢] 女性： 1. いい仕事、できてよかったね。

2. 仕事、なくて大変だったね。

3. お疲れ様、ゆっくり休んで。[正答]

一般的に試験では、所要時間が長くなると、受験者の体力や気力の低下により、解答に誤差が出る恐れがあるが、即時応答はテキストが短く、時間内により多くの項目を出題することを可能にしている。社会的に利用される大規模試験では信頼性が求められるが、試験全体の項目数を多く保つことは、 α 係数（信頼性を表す指標）を高める上で重要な条件となる。

2. 研究の背景と目的

筆者は JLPT の問題作成を行っている。全ての試験問題には、その問題で測ろうとするもの、つまり、出題意図がある。JLPT は実施後に分析され、試験の妥当性や信頼性が検証され、一つ一つの項目についても、困難度や識別力、各選択肢の選択率などから検証される。しかし、受験者がどのようにして答えを選び、なぜその選択肢を選んだのか、テストで測ろうとしたものが測れていたかは、数値を手がかりとした推論の域を出ないところがある。そこで、JLPT 聴解試験の妥当性検証の一環として、解答プロセスを明らかにするため、日本語中上級以上の NNS を対象に即時応答2題を使用し、プロトコル調査を行った。本調査の結果は、同時に、NNS の聞き取りの困難点においても、その一端を明らかにする。

即時応答を対象とするのには二つの理由がある。一つは、改定後に設けられた新しい形式の問題であり、これまでに問題作成者の立場からの研究が公開されていないことである⁽²⁾。即時応答の性質や何を測ろうとしているのかを踏まえた上で、正答を選ぶまでのプロセスを明らかにすることは、聴解テストの作成や評価の分野において意義があろう。もう一つは、即時応答が相手の発話を単に理解するだけでなく、現実の会話場面で求められる「応答する」という役割を反映させた問題であり、(テストの談話という制約はあるものの) その点において、実際の会話場面と近いからである。その解答プロセスや聞き取りの困難点の解明は、聴解や会話の授業など、教育の現場にも広く還元できるものと考えられる。

なお、試験の妥当性検証については今後も継続して行われるもので、能力域別などさまざまな観点で見ていく必要があり、本稿は、現段階での報告とする。

3. 先行研究

横山 (2018:77) は、聴解研究の困難点として、次の4つを挙げている。①インプット（音声）は目に見えず残らない②継続的な即時処理を余儀なくされる③理解に言語知識だけでなく非言語知識（背景知識・世界知識）が大きく関わる④聴解の過程も結果（理解）も直接的な観察が不可能である。こうした前提のもと、聴解の研究を進める必要がある。

聴解には対話場面と独話場面がある。対話の場合、聞き手は、聞き逃したところ、意味が分からないところを聞き返すことができるが、アナウンスなど聞き手が一方的に聞く立場となる独話では、それができない。この点につき、今回扱う JLPT 即時応答の聞き取りは独話と同

じであると言える。水田（1996）は独話の聞き取り上の問題を引き起こす原因について、母語話者はテキスト上の（文脈上の）意味解釈に起因するが、学習者は分節化や辞書的意味の言語知識の不足が大きな原因となっているとし、両者とも問題処理のために推測のストラテジーを多用していることを明らかにした。

一方で、テストにおける聴解は、「正答を得ることが焦点となり、日常生活における聴解とは目的が異なる」と横山（2004：192）は指摘する。制限時間があつたり、選択肢からの影響を受けて理解を構築したりすることがあるので、特殊な条件下だと言える。第二言語の多肢選択式聴解テストを扱った研究には Ross（1997）がある。英語学習者40名に対し、短い説明文（例：Before the development of air travel, this was the only method of transport available for people wishing to make journeys overseas.）を聞いて、内容と一致する絵を選ぶというテストを行い、聞き取ったことや選んだ理由を回想法で聴取した。そして、音声処理のレベルにより、Noise/ Distraction/ Syllable restructuring/ Syllable identification/ Key word association/ Linked key words/ Phrases/ Complete images という8段階の解答ストラテジーを設定している。

また、改定前の JLPT の聴解問題を使用した調査には、日本語教育学会・調査研究第1小委員会（1992）がある。これは無作意誤差^③の原因を解明し、問題の改善を図ることを目的とした調査で、NNS が多肢選択式の問題に解答して内省したプロトコルから、解答者がスクリプトの場面や状況から喚起されるスキーマなどにより、さまざまな推測を行って理解を試み、解答していることが分かる。こうした情報は、数量的な統計データからは得にくい情報である。ただし、これは選択肢が文字や図表など視覚で提示され、主に質問文（例：～はどうなりましたか）のある長いテキストの問題を対象にした調査であるため、本調査の即時応答とはテキストやテスト形式の性質を異にする。

4. 調査概要

4.1 調査協力者

日本国内で国際交流基金の日本語研修、もしくは日本語教師研修に参加している NNS45名（表1の協力者 A～AS）に協力を得た。漢字圏母語話者23名、非漢字圏母語話者22名で、地域別の内訳は、漢字圏が中国21：韓国2、非漢字圏が東欧10：東南アジア4：西欧2：中東2：南米2：南アジア2である。

日本語レベルは中上級以上であり、JLPT の N1 または N2 レベルに相当する。表1の「JLPT 取得級」は過去に合格している JLPT のレベルである。「1級」、「2級」とは改定前のレベル設定で、おおよそ改定後の N1、N2 に相当する。取得級が「不明」の協力者は、N2 合格以上という応募条件を踏まえて応募してくれた協力者で、調査者も調査を通して中上級以上であると判定している。調査は2017年10月から2018年1月にかけて行った。

表1 調査協力者の属性

協力者	母語	JLPT 取得級	協力者	母語	JLPT 取得級	協力者	母語	JLPT 取得級
A	漢字圏	不明	P	漢字圏	N2	AE	非漢字圏	N2
B	漢字圏	不明	Q	漢字圏	N1	AF	非漢字圏	N2
C	漢字圏	不明	R	漢字圏	N1	AG	漢字圏	不明
D	漢字圏	不明	S	漢字圏	N1	AH	非漢字圏	N1
E	漢字圏	不明	T	漢字圏	N2	AI	非漢字圏	2級
F	漢字圏	不明	U	非漢字圏	N2	AJ	非漢字圏	N2
G	漢字圏	不明	V	非漢字圏	不明	AK	非漢字圏	N2
H	漢字圏	不明	W	非漢字圏	N2	AL	非漢字圏	2級
I	漢字圏	不明	X	非漢字圏	N2	AM	非漢字圏	2級
J	漢字圏	不明	Y	非漢字圏	N2	AN	非漢字圏	1級
K	漢字圏	N2	Z	非漢字圏	不明	AO	非漢字圏	2級
L	漢字圏	N1	AA	非漢字圏	N2	AP	非漢字圏	1級
M	非漢字圏	N2	AB	漢字圏	1級	AQ	非漢字圏	N2
N	漢字圏	N1	AC	漢字圏	1級	AR	非漢字圏	N2
O	漢字圏	N2	AD	漢字圏	不明	AS	非漢字圏	N2

4.2 調査に使用した問題

過去に JLPT で出題された即時応答2題（以下、問題1、問題2とする）を使用した⁽⁴⁾。問題は全て音声で提示される。2題はそれぞれ「～を除いて」、「～を踏まえて」というテ形従属節の理解を問う問題である。比較、対照して見えてくるものがあると考え、両項目を選んだ。改定後の JLPT では文法や語彙の出題基準は公開されていないが、改定前の出題基準では、「～を除いて」は2級、「～を踏まえて」は1級の文法として公開されている。なお、協力者45名のうち、問題1は P、T、U、AA の4名、問題2は O、Q、S の3名が、各項目が出題された試験回を受験していた。しかし、試験実施から時間が経過しており、協力者自身から前に同じ問題を解答した記憶があると語られなかったため、本稿では調査対象から外さないことにした。

- 問題1** [スクリプト] 女性： 部長、社内アンケート、山田さんを除いて、全員から回答を得ました。
 [選択肢] 男性： 1. 山田さん、回答早いなあ。
 2. 山田さん、答えてないの？ [正答]
 3. 山田さんが全員分集めたんだね。

- 問題2** [スクリプト] 男性： 第一ビルの工事の見積書、作成して。前例を踏まえてね。
 [選択肢] 女性： 1. ああ、前回のも一緒に出すんですね。
 2. あの一、前例はないんでしょうか。
 3. はい、前のを参考にします。[正答]

4.3 調査手順

筆者ら、JLPT 聴解試験の問題作成を担当する3名の調査者が分担して協力者と1対1で行った。まず、調査について説明したあと、手順を理解してもらうために練習を行った。練習問題は同等の難易度と推定される別の問題を使用した。練習を含めた全3題について1題ずつ次の手順で行い、協力者の許可を得て、i) ~ v) を録音した。

- i) 1回目の音声聞き取り：スクリプトと全選択肢を通して1回聞いてもらう
- ii) 選択肢ごとに確信度（正解だ／たぶん正解だと思う／よく分からない／たぶん間違いだと思う／間違いだ）を一つ選んでもらい、正答を一つ選んでもらう
- iii) 考えたことや選んだ理由について内省しながら、話してもらう
- iv) 2回目の音声聞き取り：スクリプトと各選択肢を一つずつ区切って音声を聞き、思い出したことがあれば話してもらう
- v) 文字スクリプトを提示し、思い出したことや新たな気づきについて話してもらう

4.4 データの分析

回想プロトコルを文字化^⑤し、プロトコルから、答えを選んだ要因に繋がったと考えられる箇所を抜き出し、理由ごとにまとめた。回想法によるプロトコル聴取は横山（2004:189）が指摘するように、最初に音声を聞いたときの記憶が薄れたり、再度聞き直している際の思考が混在したりする可能性がある。本調査では、基本的に1回目の聞き取り直後の発話を採用し、2回目以降に語られたことは、選ばれた選択肢・確信度と、発言内容の整合性から、1回目に考えたこととして信憑性が高いと判断した箇所のみ採用し、理由がよく分からないものは「不明」とした。

5. 調査結果と考察

各選択肢を選んだ理由について、正答、誤答（一つ目）、誤答（二つ目）の順にプロトコル（《 》）で示す）を通して概観していく。理由については、選択肢ごとに①、②…と、丸囲みの数字で分類して示し、選んだ選択肢が1なら1-①、1-②…、2なら2-①、2-②…と記述する。

各項目には、正答を選ぶ上で必要な情報、つまり、Necessary Information (Buck&Tatsuoka 1998)^⑥がある。問題1では「山田さんを除いて」、問題2では「前例を踏まえて」というテ形従属節の部分がこれにあたる。

なお、両問とも4名（同一人物は2名）がスクリプトの意味を捉えられずに無解答であった。本稿では無解答は考察から外す。

5.1 問題1

正答選択率は35.6%で、いずれの誤答もよく選ばれている。ここでは、正答選択肢2→誤答選択肢1→誤答選択肢3の順で、各選択肢が選ばれた理由をプロトコルの例とともに、見ていく。

表2 問題1の選択肢の選択率 (n=45)

	選択率	内訳	調査協力者
選択肢1	24.4%	11名	B,C,E,G,K,M,X,Y,AE,AJ,AO
選択肢2	35.6%	16名	A,D,F,I,J,O,T,U,V,W,AA,AF,AG,AH,AK,AP
選択肢3	31.1%	14名	H,L,N,P,R,S,AB,AC,AI,AL,AN,AQ,AR,AS

※無解答8.9% (4名) : Q,Z,AD,AM

正答2-① Necessary Information を正しく解釈 (13名) : A,D,F,I,J,U,V,W,AA,AF,AG,AH,AP

正答選択者16名のうち、13名が Necessary Information を正しく捉えていた。

《A: あの一、たぶんキーセンテンスは、山田さんを除いて全員分を集めましたということを知りましたので、つまり山田さん以外ですね。ですから2にしました。》

《AA: これは、山田さんを除いて全員から回答を得ましたというのは、山田さんは入ってません。ていう…。山田さんがしたかどうかは分かりませんので、これ [選択肢2] にしました。》

正答2-② その他 (3名) : O,T,AK

《T: みんなのアンケートは、今、えーっと…、はい…たぶん、か、返しました?でも、山田さんは何を、ほかの人と違います<笑い>だからたぶん山田さんはそのアンケートをえっと…知りません?はい。》

協力者Tの回想からは「ほかの人と違う」というのが「除いて」からの推測か、全選択肢に山田さんが入っているからか特定できず、その他とした。

《O: 3番の答えの中で、ある言葉の意味はちょっと分かりませんから、2番を選びました。⇒ (文字で見ても) O: 「回答」に対応して「答え」がいいかもしれない、だから2を選びました。(略) 特に「アンケート」とか「答え」がいいかもしれないなと思って。》

Oは一回目直後、選択肢内の未知語の有無で解答したと述べたが、文字で確認したあと、「回答」「アンケート」という語と選択肢2の「答え」を結び付けたと回想した。AKは、2が上司としていい反応だという理由で選んでいた。スクリプトの意味は分かっていたため、反応とは、音声情報や何らかの言語情報から得たムードによるものであろうと考えられる。

誤答1-① 山田さんが動作主だと誤認 (7名) : B,C,M,X,Y,AE,AJ

Cは「山田さんが答えた」と誤認していた。

《C: 問題としては、やなぎさん[山田さん]、何々ってあの、回答ができましたかというような、んー、

流れで、はい。なんか、やなぎさんがもう、正解できましたというふうに、はい。》

AEは「山田さんが集めた」と誤認して正答2を排除してから、1と3で迷い、1を選んだ。

《AE：えー、山田さんは何かやったけど、でもそれは何？（略）その情報を集まる人？かな。（略）1番と3番なんかちょっと迷って、でも2番はなんかその、なんだっけ、その、集まる人じゃなく、その、山田さんはなんか、答える人。だからそれ[選択肢2]はなんか全然違うと思います。》

Bは「山田さん」「回答を」「ました」から「山田さん、回答早いなあ」が結び付いたという。

ほかに、「カイトーオエマシタ」という音から「彼は書き終わりました」(M)、「あの人は全部書いておいた」(AJ)と解釈した分節化に関わる問題も見られた。Yは「(山田さんは)仕事が完成したみたいな話」と解釈していた。「オエマシタ」、もしくは文末の「マシタ」で完成をイメージしたようだ。XはNecessary Informationに焦点を当てたが、「除いて」を「望む」と誤認し、1が正解のように聞こえたとして、1を選んだ。

《X：山田さん何をしましたか。望む？と関係あった言葉が出て何とか、山田さんからなにか欲しかったというようなことが出て、（略）2つの言葉のは、どのように繋がったのかよく受け取れなくて、で、それを分かったら正解を見つけるだと思ふ。》

誤答1-② その他 (2名)：E,K / 誤答1-③ 不明 (2名)：G,AO

Eは話速についていけず、意味が理解できなかった。Kは「アンケート」と「全員」という語から「早い」を連想して1を選ぶというストラテジーを見せた。G、AOは理由が不明である。

誤答3-① 山田さんが動作主だと誤認 (9名)：L,P,R,S,AB,AL,AQ,AR,AS

従属節の「山田さん」の格を誤認したもので、3つのパターンがあった。一つ目は、Necessary Informationを「山田さんが望んで」(L、S、AB、AR)、もしくは「頼んで」(R)と誤認したものである。Rは1回目では3を選んだが、2回目で気づき、訂正している。

《S：えー、会社の中にアンケートがあって山田さんは担当して、で、山田さんが望んだよう、とおりに、えー、会社の全員のアンケートをもらって、えーまとめました。で、女の人は部長にお知らせました。》

《R：んー。質問[スクリプト]の中で、山田さんがアンケートに答えたことじゃなくてアンケートをほかの人に配った、そういうことを言いました。だから3番目の答えを選びました。⇒(2回目直後)R：除いて、の、除いて、を、頼んだということを、に間違った。間違えました。だから2番は正解です。》

二つ目は「除いて」を聞いたかどうかは不明だが、「山田さんがみんなの答えを全部集めた」と解釈したもの(AL、AQ)である。これは選択肢3の内容に沿っている。選択肢の内容がスクリプトの推論に影響したようである。三つ目は「山田さんが何かをした」と捉えたPとASで、両者とも答えを選ぶときには1と3で迷っていたが、3を選んだ。

《AL：[山田さんは]みんなの答えを集めたということで3番です。（略）こっち側[選択肢3]の方では、

もう全部集まったという話がありますから正しいと思いました。》

《P：えーと、何々さんは、何々ことをしましたと聞きました。(略) 3番はテーマが忘れました》

《AS：部長はその女の人が言ったことを聞いて、全部は山田さんがやったことですから、たぶん1と3番は似ています、似ていますが、えーと、これは私の気持ち、私の sense、たぶん3番は正解だと思います。》

誤答3-② 聞き取った語句から文の意味を連想 (1名)：AC

《AC：えー、部長、アンケートが全部、あつ、集まる、という意味でしょうか。だから3。》

従属節を聞き取っていない。動作主をどう理解したかは明確ではないが、「集まる」と述べていることから、「集めた」という語を含む選択肢3に影響を受けたものと考えられる。

誤答3-③ その他 (3名)：N, AI, AN / 3-④ 不明 (1名)：H

AIは選択肢3の文末の「ね」が女性の話した内容への反応としていいという理由で選び、Nも雰囲気を選んだとしている。一方でANは、「除いて」は理解していたが、選択肢2を「出してないよ」と理解したため、2を正答とせず、3を選んだという。Hの理由は不明だった。

問題1では Necessary Information である従属節の正しい理解によって、正答が選ばれていた。一方、誤答選択者には、従属節の聞き逃し、テ形動詞や動作主の誤認が多く確認された。

5.2 問題2

正答選択率は60.0%で、誤答では1が2より多く選ばれていた。以下、正答選択肢3→誤答選択肢1→誤答選択肢2の順で、問題1と同様に選択理由とプロトコル例を見ていく。

表3 問題2の選択肢の選択率 (n=45)

	選択率	内訳	調査協力者
選択肢1	24.4%	11名	A,B,I,R,W,X,Y,AL,AO,AP,AS
選択肢2	6.7%	3名	M,O,P
選択肢3	60.0%	27名	C,D,E,F,G,H,J,K,L,N,Q,S,T,U,V,AA,AB,AC,AE,AF,AG,AH,AJ,AK,AM,AN,AR

※無解答8.9% (4名)：Z,AD,AI,AQ

正答3-① Necessary Information を正しく解釈・推測 (8名)：C,D,F,G,J,AH,AM,AN

Dはスクリプトの詳細を聞き取って再生している。GやANは全ての語句を聞き取ったわけではないが、Necessary Information に着目し、正答を得ている。

《D：男の人が言ったのが、第一ビルの、見積表を作ってください、前例を踏まえてねというのが、前例を踏まえた上で、今回の、その第一ビルの見積表を作ってくださいというのが指示やから (略) あ、前の

文を参考しますっていうのが答えだから、ま、そこ正解だろうなと思ったんです。》

《G：まずは質問[スクリプト]は、前例を参考にして何かを作成してという命令を出しました。》

《AN：見積書を作るときは前例も使ってくださいという表現なんで、彼女はまあはい、使いますと。》

正答3-② 指示機能と「はい」・「します」とのマッチング (5名)：K,Q,T,AA,AF

文末のテ形や人間関係から、指示・命令機能だと推測し、その応答として「はい」や「します」という意思表示が合うとして正答を選んだ協力者が5名いた。

《AF：分からない言葉も出てきたので、全体的にあの一、どんな話がよく分からなかったんですけど、ただ、あの、依頼していることとか頼むことをよく分かりました。(略) 3番はあの一ちゃんと、あの、合ってる反応があったので、それかなーと思ったんです。(略) なんか「はい」とか「そうします」とかそんな感じ。》

《Q：3番目は、上司からあの、仕事が、仕事を任せて、すぐ、はい、何々を、前のことを参考して完成します、という感じで、3番目はたぶん一番いいかなと思います。》

Qは「踏まえて」は聞き取れていなかった。選択肢3から「参考」を引用したと考える。

《(文字で見て) AA：もし「はい」がなかったら、「前の参考にしますね」だったら、たぶん選ばないかもしれません。はい、します、っていう感じだったので、なんか命令に適当な答えに聞こえました。》

正答3-③ ムードで選ぶ (6名)：E,L,N,AE,AK,AR

音声情報や何らかの言語情報から得たムードで選んだものである。プロトコルに表出しなかっただけで、3-②のようにテ形など言語形式からムードを得た可能性もある。

《E：さあ、どんな点が〈笑い〉。まあ一応。ただ、その、やっぱりそのニュアンスから。二人の会話の中で、一応、意味本当に分からない場合は、二人のニュアンスから選ぶというかな。》

《(文字で見て) AR：3番目を選ぶ理由は言い方や雰囲気、あー、雰囲気だけで…。》

ARは1と3で迷い、3を選んだが、その理由は不明だった。しかし、文字で見たときに、言い方や雰囲気で選んだと明言しているため、この分類とした。

正答3-④ その他 (6名)：S,V,AB,AC,AG,AJ / 正答3-⑤ 不明 (2名)：H,U

ABは「フマエテ」を「マエニシテ」と聞き、選択肢3の「マエ」とのマッチングで選んだ。Sは、選択肢2はスクリプトの内容と合わないとして排除し、1と3で迷い、選択肢3から「踏まえて」の意味を「参考にして」だと推測したという。Vは2と3で迷い、3を選んだが、文字で見て「ゼン」からの推測だったと言及している。

《(文字で見て) V：3も、んー、まあ、あの、これ、ゼンレーって聞いたら、ゼンはたぶん前(まえ)の漢字だと想像してて、前(まえ)のなんとかと関係があると思いました。》

AC、AG、AJは当て推量で選んだ。H、Uはプロトコルからは理由が判断できず、不明とした。

誤答1-① Necessary Information の語句を誤認 (7名) : A,R,W,Y,AL,AO,AP

問題1と同様、テ形動詞の聞き取りと語句の特定、語義の推測というプロセスでの誤認が見られた。A、W、Y、AO、APの5名は、「踏まえて」を「含めて」と解釈、推測していた。

《W：あの一、なんか、前回を含めて、と聞いたけど。》

YとAPは「ゼンレー」を「全部の例」と誤認したことが「含める」という推測に繋がった。

《AP：えー、全ての資料ってということで、ゼンレーも含めなければいけないってということで、全てですね。で、確か女性の答えには、そういう意味が含まれてたと思います。》

ALも「ゼン」を「全」と推測し、「全部集まって」と解釈していた。Rは「踏まえてね」を「しないでね」という注意喚起だと誤認し、選択肢1の確認の反応が合うとして選んでいた。

《AL：言葉の意味がはっきり分かりませんでしたから、聞いたことで、なんとか言葉が入っている、全部集まって、全部という話があったから、それだと思って、丸にしました。》

《(文字で見て) R：ゼンレーをしないでねと、聞きまちが、聞き間違えました。》

誤答1-② ムードで選ぶ (2名) : B,X

Bは全体のニュアンスとイントネーションから選んだという。Xは文字で見たときにも文末の依頼機能には気づいていない。反応が合うというのはムードから捉えたものだと判断した。

《X：大体反応として、あー、なんか合ってる?と思ったけど、内容はどうだか<笑い>覚えてないですけど。⇒(文字で見て) X：第一、ビルの、工事の、見積書、作成した。あ、男性が作成した。》

誤答1-③ その他 (2名) : I,AS

Iはスクリプト「前例」と選択肢「前回」のマッチングで選び、ASは当て推量だった。

《I：前回と前例は同じ意味かなーとちょっと迷っていますね。前は、この前の意味です。前例は、えーと前例はたぶんこの前の見積書かなと思います。なら同じ意味ですが、ちょっと迷っています。》

誤答2-① 「ゼンレー」のマッチング (3名) : M,O,P

3名は、スクリプトと同じ「前例」があるという理由で2を選んだが、Mはセンレー、Oはネンレー、Pはゼンレン、ゼンネンと聞き取り、語義は確かでなく、音素を頼りにしていた。

《P：んー、2番は同じ言葉があるので、他の答えより、もし、正しいのかもしれませんが。》

問題2でも Necessary Information の正しい理解が解答の正誤を分けていたが、一方で、応答詞や話し方のムードが正答を選ぶヒントになり、無作意誤差に繋がった可能性がある。また、

誤答選択者の半数 (1-①) は、Necessary Information に着目したものの、テ形動詞の聞き取り、語義の推測がうまくいかず、正答が選べなかった。スクリプトと同じ語句の有無で答えを選ぼうとするストラテジーも散見された。

6. まとめと今後の課題

NNS の解答プロセスから、問題1、問題2とも Necessary Information の理解が解答の正誤を分けていたことが分かった。問題の出題意図（何を問うか）が解答に反映されていたと言える。ただし、問題2では応答詞やムードで正答が選びやすくなっていた可能性が示唆された。

また、両問とも誤答選択者には、Necessary Information（本稿ではテ形従属節）を特定はできても、テ形動詞の聞き取りや語義の推測を誤り、誤答を選ぶケースが確認された。坂本(1993)は英語を母語とする準中級・上級学習者を対象に、初・玉岡・大和(2012)は中国語を母語とする初級学習者を対象にした調査で、テ形の習得では「いて・いで系」が難しいとの結果を得ている。これは「除いて」を「望んで」と間違えたケースとも繋がる。他方で、「踏まえて」を「含めて」などと間違えるケースからは、テ形の聞き取りや意味理解は活用形だけの問題ではなく、スクリプト中のほかの未知語や（テストでは）選択肢の影響を受けるということも本研究で示唆された。これまでのテ形習得調査の多くは、辞書形や無意味語からテ形を作らせるものであるが、今後、聴解テキストにおけるテ形動詞の意味理解を問う調査も必要であろう。

さらに、「山田さんを除いて」を「山田さんが望んで」とする誤認からは、中上級以上の NNS であっても、格、つまり機能語に注意が向いていないことが分かる。Field (2008) は中級英語学習者の上位群と下位群に聞き取り再生テストを行った。上位群は下位群より内容語、機能語ともに再生率が高いが、内容語と機能語の再生率の差については、群間差が見られなかったと報告している。本調査の問題1でも、格助詞「を」に注意していれば、「望んで」という推測や誤認は生じにくかったであろう。中級以上の日本語学習では複文の学習が進む。格助詞に注意した聞き方というものが、中級以降での聴解能力を伸ばす一策になるのではないだろうか。

最後に、堀川・板橋・田淵(2019)では、本調査の問題1のプロトコルから Ross (1997) の8段階の解答ストラテジーを援用し、即時応答の解答においても、聴解能力に段階があり、その段階が解答に反映されていることを示している。現在、同様の分析を問題2でも進めており、最終的には、本研究を JLPT 聴解試験の妥当性検証の一環として位置づけたい。

謝辞：本調査は、日本語試験センターの堀川有美研究員、田淵咲子研究員と共同で行ったものです。文字化作業は同センター聴解のスタッフ、アシスタントの皆さんにご協力いただきました。心から感謝申し上げます。

〔注〕

- ⁽¹⁾ JLPT のホームページでは、そのほかの問題例も公開している。<<https://www.jlpt.jp/index.html>>
- ⁽²⁾ 試験改定後は、出題された問題や分析結果は公開していないため。
- ⁽³⁾ ランダム誤差ともいう。日本語教育学会・調査研究第1小委員会 (1992) では、受験者のモチベーションの低下や不注意、当て推量などにより、無作意に解答が選択されて生じる得点の誤差を主に扱っている。
- ⁽⁴⁾ この2項目は本調査の実施後に公式問題集に収録され、注(1)の JLPT ホームページで公開されている。
- ⁽⁵⁾ 宇佐美 (2015) を参考にして文字化を行った。
- ⁽⁶⁾ Buck&Tatsuoka (1998: 134) は、Necessary information を次のように定義している。“We defined it as the information in the text which the reader must understand to be certain of the correct answer.”
本稿では reader を listener と解釈する。

〔参考資料〕

- 宇佐美まゆみ (2015) 「基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ) 2015年改訂版」<<https://ninjal-usamilab.info/pdf/btsj/btsj2015.pdf>>
- 国際交流基金・日本国際教育支援協会 (2010) 『新しい「日本語能力試験」ガイドブック』<<https://www.jlpt.jp/reference/pdf/guidebook1.pdf>>
- 坂本正 (1993) 「英語話者における「テ形」形成規則の習得について」『日本語教育』80、125-132
- 初相娟・玉岡賀津雄・大和祐子 (2012) 「初級中国人日本語学習者のテ形習得」『日本教科教育学会誌』35(2)、63-72
- 日本語教育学会・調査研究第1小委員会 (1992) 『日本語聴解問題の改善に関する考察: 最終報告』日本語教育学会
- 堀川有美・板橋貴子・田淵咲子 (2019) 「日本語能力試験聴解「即時応答」のプロトコル調査の報告」『日本言語テスト学会第22回全国研究大会発表要綱』、37
- 水田澄子 (1996) 「独話聞き取りに見られる問題処理のストラテジー」『世界の日本語教育』6
- 横山紀子 (2004) 「第2言語における聴解ストラテジー研究—概観と今後の展望—」『第二言語習得・教育の研究最前線2004年版』、184-201
- 横山紀子 (2018) 「聴解能力評価に関する研究概観—言語評価のディレンマを克服するために—」『第二言語としての日本語の習得研究』21、77-97
- Buck, G. & Tatsuoka, K (1998). Application of the rule-space procedure to language testing: Examining attributes of a free response listening test. *Language Testing*, 15(2), pp.119-157.
- Field, J. (2008). Bricks or mortar: Which parts of the input does a second language listener rely on? *TESOL Quarterly*, 42(3), pp.411-432.
- Ross, S. (1997). An introspective analysis of listener inferencing on a second language listening test, In G. Kasper & E. Kellerman (Eds.), *Communication strategies: Psycholinguistic and sociolinguistic perspectives*. NY: Longman, pp.216-237.